３　花　　き

項　　　目	作　　　業　　　内　　　容
	（今月の作業のポイント） ○露地花きの湿害対策 ○施設花きの病害・生理障害対策 ○シンテッポウユリの露地栽培管理と収穫 ○シクラメンの施肥管理 ○ハボタンの育苗 ○デルフィニウムのほ場準備
（１）露地花きの湿害対策	７月は梅雨期の高温多湿により病害が発生しやすくなるので、農薬散布を徹底し予防に努める。梅雨後半には前線の活動が活発になり、大雨や局地的な集中豪雨が起こりやすくなるため、排水溝の確認や再整備により排水能力を高めておく。 また、降水量が多くなると土壌中の肥料が流亡するので、追肥を行うとともに軽く中耕して土壌中に酸素を供給する。なお、根痛みで日中のしおれが回復しない場合は、薄い液肥を葉面散布し、草勢が回復してから追肥する。
（２）施設花きの病害・生理障害対策	７月は露地栽培と同様に高温多湿になりやすい。灰色かび病やべと病等の病害が多発、まん延しやすくなるので、送風や換気により湿度を低下させるとともに、雨の間の防除を心がける。 また、トルコギキョウ、ばらなどでは、曇や雨天が続いた後の晴天や梅雨明けの強い日射しにより、葉や花弁の焼け症が発生しやすくなる。そのため、寒冷紗等で必ず遮光し、植物体の昇温と過度の蒸散を抑える。
（３）シンテッポウユリの栽培管理と収穫	７月中旬頃からは早生系品種の収穫期となる。日中に採花すると花弁に焼け症が発生する可能性があるため、特に晴天時の採花は気温の高くない朝８時頃までに終了する。切り花は直射日光が当たらないよ 写真　　収穫間際のシンテッポウユリ

項　　　目	作　　　業　　　内　　　容
	う収穫クロスなどに包み、できるだけ早く水上げし、調整した後に冷蔵庫内で保管する。採花の適期は開花４～５日前で、蕾が白味を帯びる前の緑の状態である。 　なお、シンテッポウユリは他のゆりに比べ生育にばらつきがあり、採花期間が長くなるため、葉枯病の防除を徹底する。
（４）シクラメンの施肥管理	７月はシクラメンの花芽形成期であり、植物内のチッ素濃度が高すぎると花芽の形成が遅れる原因となる。このため７月下旬より液肥のチッ素濃度を 30 mg/L（ppm）に落とし、葉色に注意しながら生育をやや抑え気味に管理する。ただし、リン酸とカリは十分に与える必要があるので、含有比率の高い置き肥を施用する。さらに、夏場はカルシウム欠乏が出やすいため、カルシウム剤を２週間間隔で 10 月頃まで継続して散布する。 　また、11～12 月に開花する花の花芽分化は７～８月に完了するが、マッチ棒の大きさ以上に発達した花芽では 25℃以上の高温で伸長抑制や生育阻害が起こりやすくなる。晴天時には 50～70％の遮光資材を展張し、換気を十分に行うことで施設内の昇温防止に努める。遮光による照度不足は葉や葉柄が軟弱になる原因であるため、鉢の間隔を広げ受光面積を確保する。
（５）ハボタンの育苗	年末出荷向けは７月中旬～８月上旬には種し、は種には 200 穴のセルトレイを用いる。は種が遅れると十分な葉数を確保できなくなるので注意する。 　25℃程度が発芽適温であるが、それ以上の高温では発芽が抑制されて不揃いになるため、黒寒冷紗などで遮光する。発芽後は、徒長防止のため遮光を中止する。 　また、高温期は胚軸が伸びやすく腰高の苗になりやすいので、子葉が展開した時期（は種後５日目頃）にわい化剤を処理する。 　ポット上げの時期は、は種後 20～30 日（本葉２、３枚頃）を目安とし、それまでは週１回程度液肥を施用する。
（６）デルフィニウムのほ場準備	６月で収穫を終えたデルフィニウムは、放置すると病害虫の温床となるため早期に除去する。その後のハウス内にはソルゴーをは種し、土壌改良を図る。除塩を兼ねた栽培目的でもあるため、は種後約 50 日でソルゴーを抜き取り、ほ場外に持ち出す。

（作成　農林水産研究所）